

極小主義仮説と関係節の派生

Jason Ginsburg・寺田 寛

本研究の目的は、強い極小主義仮説(SMT) (Chomsky 2000) に基づいた英語の関係節の構造と派生を提案することである。よく知られているように、関係節では(1)のような対格関係詞は削除できるが、(2)のような主格関係詞は削除できない。(3)の which と that および(4)の who と that は共起できない(二重詰め Comp フィルター)。

- (1) John likes the book **that/which/Ø** I wrote the book. (2) She knows the boy **who/?that/*Ø** the boy called Mary.
(3) *Mary likes the book **which that** I wrote. (4) *She knows the boy **who that** called Mary.

関係節の派生および構造について、これまで代表的な分析が 3 つ提案された。移動分析は、関係節の外にある先行詞に対応する関係代名詞が関係節内の先頭の位置へ移動すると分析する(Chomsky 1977 ほか)。一致分析は、関係節の外にある先行詞に対応する要素が関係節内部で移動し削除されるとしている(Chomsky 1965 ほか)。そして繰り上げ分析は、関係節内から関係節の外への主要部の繰り上げを仮定する(Schachter 1973, Kayne (1994)ほか)。Kayne 1994 の繰り上げ分析によれば、関係節を伴う(5a)の派生は(5b)のように進むことになる。

(5) a. the book which John read b. [DP the [CP [[book] which ~~book~~] [IP John read ~~[[book] which book]]]]]
まず関係節内に生起する which book が関係節 CP の指定部へ移動し、移動したこの DP の内部で book だけが which の指定部へ移動する。この CP が決定詞 the によって選択されているとする Kayne の分析は、決定詞 the が関係節 CP を補部として選択するという仮定や、名詞句は決定詞句であるとする Abney (1987)の DP 分析にかなり依存しているように思われる。本研究は、DP 分析によらない関係節の派生を提案する。~~

本研究が採用する理論は次のとおりである。Chomsky (2013, 2015)に基づき、{XP,YP}構造には共有素性によりラベルが付される。Chomsky (2021)のコピー形成操作を採用し、XP と YP は同一の形を持ち、かつ同一指示的であり、さらに XP が YP を c 統御している場合に、YP は XP のコピーとして解釈される。通常 CP にある焦点要素(wh 句など)は統語構造において元の位置に留まり、CP 領域で発音されることが可能である(Chomsky 2024)。

本研究の主な提案は次のとおりである。[1]決定詞 the は独立した語彙ではなく、名詞の素性[the]である(Fong & Oishi 2025)。ゆえに the book は thebook のように表される。[2]関係節の主要部と同一の形を持つ関係節内の名詞句は、コピー形成により、そのコピーとして解釈される。[3]関係節は C_{rel}P であり、その補文標識 C_{rel} が関係節の主要部名詞句との[±human]に関する一致により which、that、who、または無音のØとして外在化される。

図 1 の関係節内では thebook₁ が write と外併合されている。主節では、これとは独立して θ 役割を与えられる thebook₂ が C_{rel}P と外併合され、{XP,YP}構造ができる。CP は文主語として生起可能である(例: [That she wrote a book] was impressive.)ため名詞素性 n を持つと考えられる。C_{rel} も名詞素性 n を持つとすれば、thebook₂ と C_{rel}P の名詞素性 n が共有され、<n,n>がそのラベルになるであろう。主節の thebook₂ は関係節内の thebook₁ を c 統御するため、コピー形成によって関係節内の thebook₁ がコピーとして解釈され、発音されない。[3]により (C_{rel} が関係節の主要部名詞句との[±human]に関する一致により)、補文標識 C_{rel} が which、that、who、またはØとして外在化される。

図 2 の主語関係節では、theboy₁ が関係節内の v*P と外併合された後、TP と内併合する。関係節 C_{rel}P が theboy₂ と外併合されると、コピー形成操作によって関係節内の theboy₁ はそのコピーとして解釈される。この名詞句と一致により、C_{rel}は who(但し方言によっては that)として発音される。

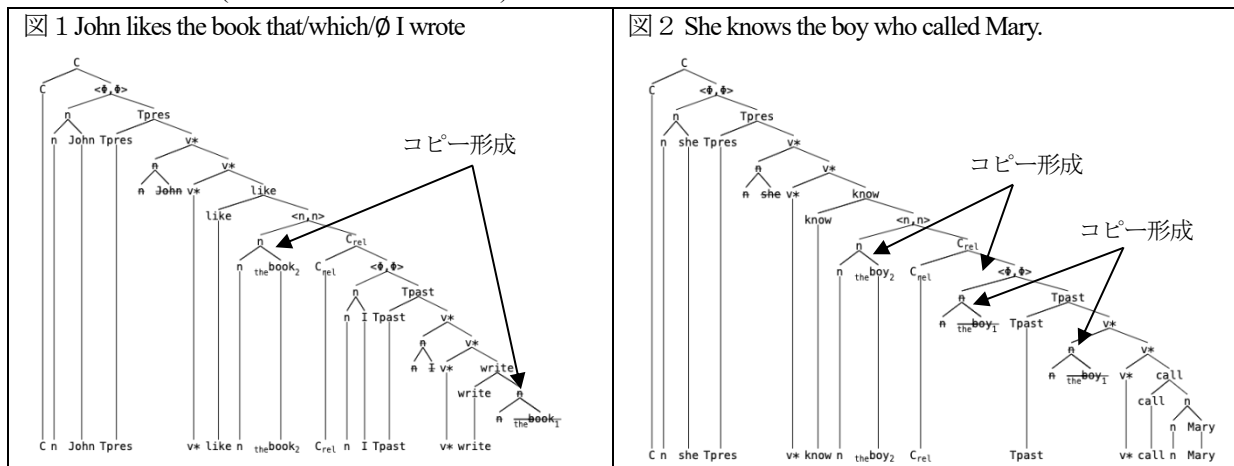


図 2 の主語関係節の場合、C_{rel}をØとして無音化できないのは、外在化において関係節を持たない(6)のような従属節を含む文と区別して、ガーデンパス文(袋小路文)になるのを避けるためであると思われる。外在化の違い

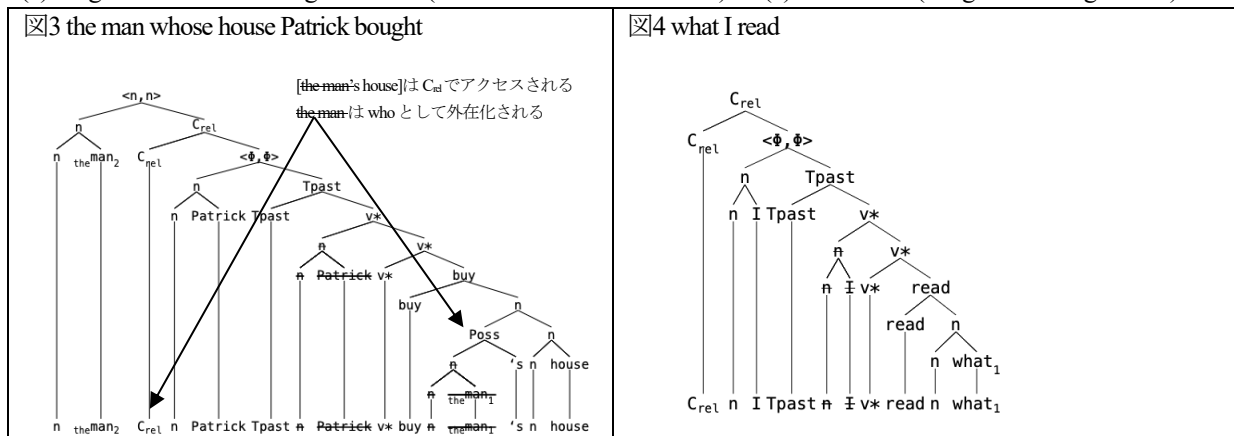
は方言の差を生み出すため、アフリカ系アメリカ方言では(7)のように、C_{rel}を $\emptyset$ として無音化することが可能である。この方言ではガーデンパス現象が問題とならない。イントネーションなどによってガーデンパスを回避している可能性があるがさらなる研究が必要である。

(6) She knows [the boy that/* $\emptyset$ called Mary]. (7) [The man saw John] went to the store. (Sistrunk 2012:5)

本分析は、属格関係節(8)にも拡張できる。図3のように、関係節内で the man₁ は属格句 PossP の主語の中に併合される。そして、the man₂ は関係節 C_{rel}P と外併合される。コピー形成によって the man₁ はコピーとして解釈される。Chomsky (2024)の提案に基づいて、属格目的語[the man's house]は元の位置に留まるが、C_{rel}P で外在化されると考えることにしよう。さらに、属格の's は接辞のため、the man₁ はコピーでありながら、who として外在化される。そうすることによって[the man's house]は[who's house]になり、外在化で whose house として発音される。

(7)の自由関係節の構造も同様に説明できる。図4に示されているように目的語の what は元の位置にとどまるが C_{rel}P 領域でアクセスされ、発音される。この場合、n 主要部を持たない C_{rel}P は主節の動詞から θ 役割が与えられる項であり、C_{rel}はゼロ形態 $\emptyset$ として外在化されると仮定する。

(8) the girl whose friends bought the cake (Keenan & Hawkins 1987:63) (9) what I read (Fong & Ginsburg 2023:3)



現代英語の関係節内に現れる which は CP の指定部ではなく、C_{rel}主要部と見なす(cf. [3])。そのため which と that が両方発音されると、同じ主要部 C_{rel}が複数回発音されることになるため、外在化がそのような余剰性を排除する。しかし、中英語では(10)に見られるように、which と that は共起可能であった。中英語(10)では、関係節内の名詞句は元の位置にとどまるが C_{rel}領域で which として外在化される。この場合の which は wh 虚辞のようなものであって、C_{rel}ではないため、発音することが可能だったと考えられる。

(10) they freend which that though has lom

'your friend that you have lost' (Kroch & Taylor 2000)

また現代英語では、which が C_{rel}に生起しない場合がある。すなわち(11)がその例であり、この文の容認性は(3)に比べて高い。Chomsky(2024)の理論によれば、only a part of which は元の位置に留まるが CP 領域で発音される。つまり which は C_{rel}で発音されていないため、主要部が余剰的に発音されることにはならない。そのため、which と that が隣り合って発音されることがある程度容認可能される。

(11) ?Mary likes the book [only a part of which that I wrote [only a part of which].]

英語の関係節の構造と派生に関する、コピー形成を用いた本研究の説明は、SMT に即したものと考えられる。ここでの提案は、C_{rel}が that/which/who/ $\emptyset$ としても音声化されることが可能であり、関係節内の同一の要素 (inscription) はコピーとして解釈されるものの、C_{rel}P の領域でアクセスされるというものである。本分析は、A' 移動を含まないものの、関係節の一致分析に近いものであると思われる。

参考文献 Abney, S. 1987. *The English noun phrase in its sentential aspect*. PhD thesis, MIT. / Chomsky, N. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. / Chomsky, N. 1977. On wh movement. In *Formal syntax*, 7 / Chomsky, N. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Essays on Minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*. / Chomsky, N. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130. / Chomsky, N. 2015. Problems of projections: Extensions. In *Structures, strategies and beyond: Studies in honour of Adriana Belletti*. / Chomsky, N. 2021. Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go. *Gengo Kenyu* 160. / Chomsky, N. 2024. The Miracle Creed and SMT. In *A Cartesian Dream*. / Fong, S. & Ginsburg, J. 2023. On the computational modeling of English relative clauses. *Open Linguistics* 9. / Fong, S. & Oishi, M. 2025. On the nature of FormSet. *Linguistic Variation*. / Kayne, Richard. 1994. *The antisymmetry of syntax*. / Keenan, E. L. & Hawkins, S. 1987. The psychological validity of the Accessibility Hierarchy. In *Universal Grammar: 15 Essays*. / Kroch, A. & Taylor, A. 2000. Penn-Helsinki parsed corpus of Middle English Second Edition. / Sistrunk, W. 2012. *The syntax of zero in African American relative clauses*. PhD thesis. East Lansing, MI: Michigan State University.